

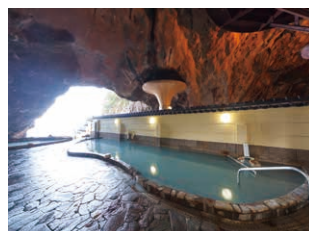


日本一の落差133メートルの那智の滝。熊野那智大社の別宮「飛瀧神社」の御神体である。

まぼろしのカルデラに 熊野の神々が宿る

約1400万年前の火山活動で生まれた熊野カルデラ。直径約40×20kmと推定され、その規模は阿蘇カルデラをはるかに上回り世界最大級といわれている。今では風化や侵食によりその地形を望むことはできないが、痕跡は自然崇拜の対象として見ることができる。那智の滝が流れ落ちる断崖もその火成岩体の一部で、侵食に強い火成岩と柔らかい地層の境界に形成されたと考えられている。

南紀熊野では、岩などに名前が付けられ信仰の対象になっていることが多いですが、それも昔から自然崇拜に根ざした熊野ならではのすね。



上／熊野カルデラがあったといわれる所に鎮座する熊野三山。南紀熊野におけるジオパークと信仰の密接さが見て取れる。下／沈み込む海洋プレートに含まれる水が熱せられ、それが地下水を温め、温泉水として地上に湧き出たため、紀伊半島には温泉地が多くある。

歴史や文化、生活も 全てがジオパーク

地質は地形を形作り、地形はその地域の人々の暮らしに大きな影響を与える。紀伊半島の中央から南半分を占める地域は、樹々が生い茂る山間部と、海岸線が複雑な沿岸部で構成されている。熊野は「神々のおわす奥まった地」であり、「よみがえりの地」とも呼ばれた。人々は大海原に出て力を合わせて鯨を捕り、さまざまな海の恵みを頂き感謝する。また住民たちは祭りを通して信仰心を確かめ互いの絆を深める。ジオパークが単なる地質学でないことは、熊野の人々の暮らしと自然の相互関係を見ると理解できる。



上／座頭鯨網掛の図(太地町立くじらの博物館蔵)。船団を組み網を仕掛け、勢子舟に乗った刃刺が鉾を打ち鯨を捕る様を描いた古絵図。左／鯨の土鈴。熊野灘沿岸は、鯨が陸の近くを頻繁に回遊すること、その鯨をいち早く発見できる高台、捕った鯨を引き上げることができる浜の存在という、捕鯨に適した地理的要件が備わっていた。鯨は地域の生活を支える「海の恵み」であった。



上／御燈祭(おとうまつり)は、神倉山の中腹近くに鎮座し、火成岩類が風化した巨岩・ゴトビキ岩を御神体とする神倉神社の例祭。松明を手にした男たちが石段を一気に駆け下りる勇壮な祭り。下／上り子とよばれる参加者は、身を清めるために一週間前から精進潔斎をしなければいけない。祭りの当日、町中に活気が充満し異様な興奮状態に包まれる。



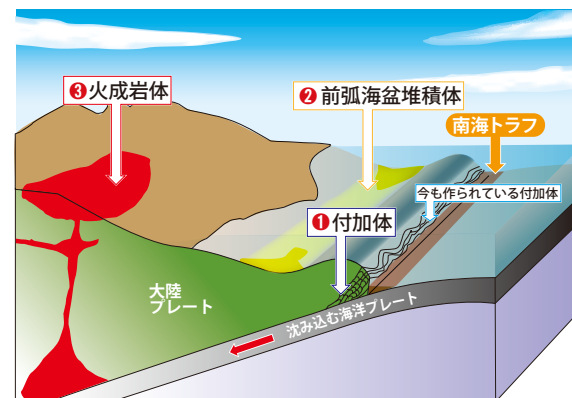
勝浦漁港といえば「生マグロ」の水揚げで有名だが、和歌山では他にも美味しい魚がいっぱい。実はこれもジオパークの要素。海の幸や食文化も、海流や複雑な海底地形などによる大地からの贈り物である。



ぜんこかいぼんたいせきたい
前弧海盆堆積体
千疊敷／白浜町

紀伊半島を作る 3種類の大地とは？

紀伊半島を作る3種類の大地とは、プレートの沈み込みにより深い海で生じた付加体、隆起し浅くなった付加体の上に砂や泥が堆積してできた前弧海盆堆積体、そして約1400万年前の激しい火山活動で生じた火成岩体のことを指す。大陸プレートの上に形成されたその3種類の地質体からなる紀伊半島は、海洋プレートの沈み込みの影響を受け、全体として今も隆起を続けている。また紀伊半島沖の南海トラフでは、今も新しい付加体が形成され続けている。



紀伊半島における①付加体は、7000～2000万年前頃、沈み込む海洋プレートと大陸プレートの境目で生じたものと考えられている。②前弧海盆堆積体は、1800～1500万年前の比較的浅い海で形成され、付加体の隆起に伴って押し上げられた。③火成岩体は、プレートの沈み込み運動でマントルと付加体深部の一部が溶けてマグマとなり上昇し、冷却固結された大地。南紀熊野では熊野カルデラの一部として形成された頃に生じたもの。

かせいがんたい
火成岩体
一枚岩／古座川町



①波の浸食でできた平らな海底が隆起して海岸段丘となった地形。②熊野カルデラ・古座川弧状岩脈(こさがわこじょうがんみやく)の一部で、流紋岩質火砕岩でできた巨大な岩壁。一枚の岩盤としては日本最大級。③かつての海溝に堆積した層が、海洋プレートの沈み込みにより完全に固まる時に形成された地層。

こんなダイナミックな地層は、他ではあまり見ることができません。それも色んな種類の地層が、熊野というエリアで多く見られるって凄いです！



ふかたい
付加体
フェニックス褶曲／すさみ町



主なジオサイトの位置

